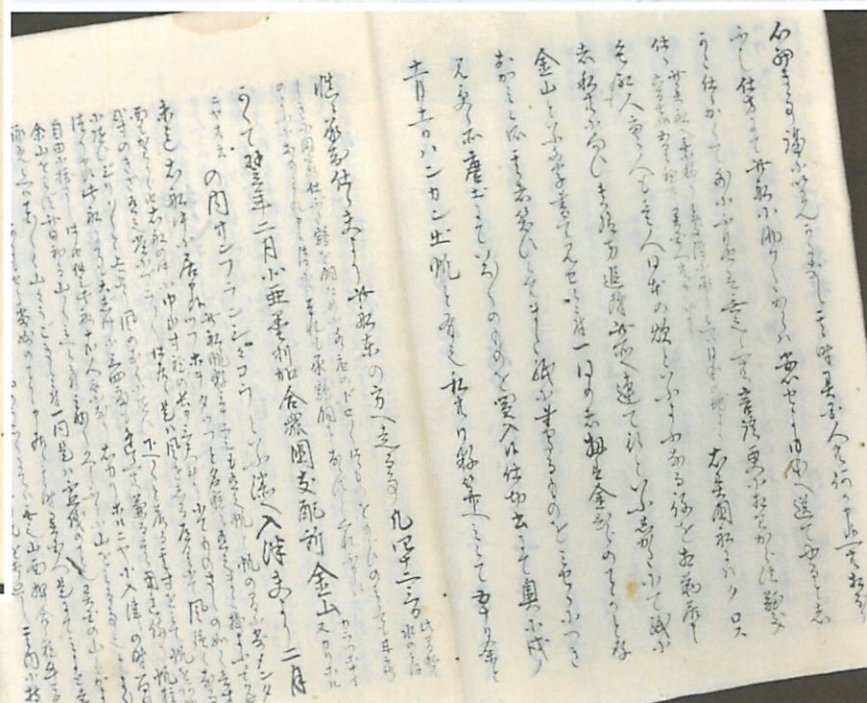
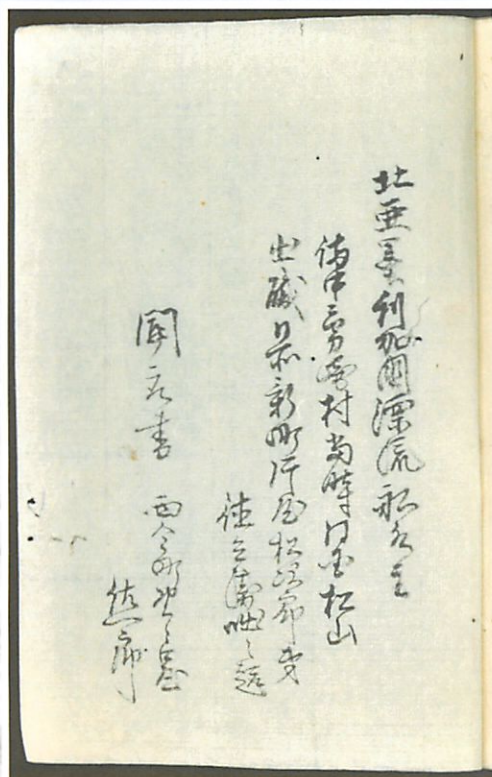


津山市史だより

2015.12
第4号



漂流記の奥書

「徳兵衛咄之趣 聞取書
西今町 野々口屋佐一郎」とある

今回発見された徳兵衛の漂流記 救助の後、サンフランシスコに入港したとの記述箇所

江戸時代には幕府によって日本人の海外渡航が禁じられていたため、一般の庶民が異国や異文化と接する機会は乏しい状況でした。けれども、海運の発達によって船舶の航行が増加したことから、海難・漂流の機会も増え、その結果として異国人と交流した人々も少なからずいました。

ここに紹介する資料は、嘉永3年（1850）に海難事故で漂流し、アメリカ船に救助されて帰郷した備中出身の水主・徳兵衛が語った漂流体験を、津山城下西今町の野々口屋佐一郎が聞き取って書き留めた「漂流記」です。この時、徳兵衛と共に漂流した人物として有名なのは、ジョセフ・ヒコの異名で知られる播磨出身の彦蔵です。

徳兵衛の漂流記としては、郷里で聞き書きされた「漂客夢物語」が既に知られています。が、この資料は市史編さんに伴う近世部会員の資料調査で新たに発見されました。聞き取りの経緯までは記されていないため、野々口屋佐一郎と徳兵衛との接点は不明ですが、ペリー来航・日本開国の衝撃によって、津山の町人の間でも異国への関心が高まっていたことをうかがわせる貴重な資料です。（小島）

編さん委員会

27年度 第1回

8月21日 於郷土博物館研修室

まず、7月から新しい任期を迎え、いずれも留任された委員の皆さんに教育長から委嘱状を交付し、正・副委員長を選出しました。その後、事務局から事業の進捗状況が報告され、事業の進展に伴う編さん計画の若干の修

正が協議されました。その中で、新しい市史のタイトルは、古い市史との混同を避けて「新修 津山市史」とすることが決まりました。また、掲載資料の筆耕要領や本文の仕様については継続審議となりました。



部会通信

◆ 自然風土・考古部会

(部会長…河本委員、副部会長…可児委員)

考古資料編の掲載遺跡を、編集方針に基づき時代や地域性を考慮して、旧石器時代から近世まで239遺跡(旧石器…10遺跡、縄文…9遺跡、弥生…55遺跡、古墳…100遺跡、古代…23遺跡、中世…26遺跡、近世…16遺跡)に絞り込み、執筆担当も決定しました。これら時代別の遺跡数から、本市では旧石器・縄文時代が少なく、弥生時代から遺跡数が増加し、古墳時代がほとんどを占めることがわかります。資料編は平成29年度、通史編は30年度刊行に向けて作業に取り組んでいます。

◆ 古代部会

(部会長…狩野委員、副部会長…今津委員)

10月に部会を開いて資料編について協議し、11月28・29日には巡見を行い、美作国の官道沿いの白鳳寺院跡や郡衙の跡などを現地調査しています。今後も資料編出版に向け、資料調査・整理を実施します。



古代部会での巡見の様子

◆ 中世部会

(部会長…三好委員、副部会長…久野委員)

引き続き関係各所の資料調査を実施しています。7月30日には、古代・近現代部会

と合同で、美作一宮である中山神社の調査を行い、神社所蔵の中世文書を確認しました。12月6日には部会を開き、資料編について協議しています。

◆近世部会

(部会長…定兼委員、副部会長…在間委員)

7月末を期限として部会員全員が通史編の項目案を提出し、その集約結果をたたき台として、9月の部会で全体の大きな内容構成と森家時代の執筆分担を決めました。11月には、津山の旧城下町エリアで巡見を行い、町割の概要や重要施設の所在など、実地を歩きながら確認しました。今後は、館蔵未整理文書や個人所蔵文書の調査を進めていきます。

◆近現代部会

(部会長…在間委員、副部会長…香山委員)

部会全体としては、9～10月に勝北歴史民俗資料館の保管資料を2回に分けて調査しました。今後も、久米歴史民俗資料館など、各資料館保管資料の調査を続けます。各執筆者も個別に、津山町議会議事録の調査・撮影、堂尾地区での自由民権関連聴き取り調査などを行っています。当面の目標である資料編の編さん・刊行に向けて、着々と準備を進めています。

◆民俗部会

(部会長…前原委員、副部会長…安倉氏)

市内各所を回っての聴き取り調査と並行して、執筆者の安倉氏を中心に阿波民具展示館や加茂町歴史民俗資料館の民具調査も進めています。9月24日～26日には、京都府立大学の東昇氏と学生4名が、泊りがけで旧めぐみ荘(民具展示室)の民具調査を行いました。そのほか、祭礼調査や「食」に関する調査も進んでいます。民話については、大井西、倭文、阿波、綾部などで調査を行いました。



京都府立大学生による民具調査の様子

編さん事業の経過(平成27年7月～)

- 7月26日 市史講座(講演会)
- 8月8日 第5回考古部会
- 8月21日 第1回編さん委員会
- 8月 「市史だより」第3号発行
- 9月20日 第2回近世部会
- 9月24～26日 京都府立大生民俗調査
- 9月30日 近現代部会資料調査(勝北)
- 10月10日 第2回古代部会
- 10月21日 近現代部会資料調査(勝北)
- 11月1～15日 近世部会巡見
- 11月28～29日 古代部会巡見
- 12月5日 近現代部会資料調査(久米)
- 12月6日 第1回中世部会

※各部会の執筆者として、新たに左の方々が加わりましたので、ご紹介します。(敬称略)

○民俗

秋田麻早子 美術史研究家

平松 里美 絵画修復スタジオ Ohara

アシスタント・コンサヴァター

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催

美作学講座

— 津山市史関連研究から —

毎回好評でした ありがとうございます

第2回

8月29日

津山の城下町と町作まちづくり

郷土博物館館長 尾島 治

(編さん室職員／近世担当)

まず、古い市史での「町作」「作人」に関する記述を確かめ、作人が零細だというのは本当なのか？との問題を提起しました。

そのうえで、津山の城下町における作人の分布や町作と作人の関係を分析し、作人が全て零細のではなく、また町作地の所有者は作人だけじゃなかったことを明らかにしました。

そして、町作地・作人の支配系統が複雑だったため、年貢収納をめぐる混乱が生じた事例を紹介したうえで、まとめとして町作とは城下町居住者が耕地を所有して耕作を行うことであると確認しました。



第3回

10月24日

吉井川の筏いかだ

前岡山県立記録資料館館長

在間宣久氏

(編さん委員／近世・近現代担当)

まず筏について、京都の保津川や木曾川などの事例も含めて、どのようなものであったかを説明された後、明治以降の新聞記事や古写真などから、筏流しによる木材運搬が大正～昭和初期に終了したことを確認されました。

そして、加茂町史編さん時に調査された物見の西矢家にまとまって残る筏関係の文書に触れ、それらの読解から、筏流しと干渉しあう堰せきの存在と、吉井川で繰り広げられた両者の紛争の歴史を紹介されました。

当時の吉井川流域は支配が錯綜していたため、紛争も幕府領と津山藩領にまたがって起こり、数度にわたる紛争はいずれも幕府領である筏側の勝訴で終わったということです。



津山市内の手焙形土器について

てあぶりがたどき
宮崎 絢子

本稿では平成15年に寄贈を受けた手焙形土器と称する土器について紹介し、併せて津山市内の手焙形土器を概観したい。あまりなじみのない土器であると思われるので、まずは土器の概要を説明する。

1 手焙形土器の概要

手焙形土器とは弥生土器の一種であり、現代の手焙用火鉢に似た形であることからこの名前がつけられた。おおむね鉢形土器の口縁部に円錐形ないし半球形の覆いをつけ、覆いの一側面に半円形に切り取られた開口部がある。器高及び口径は15〜20cm程度である。

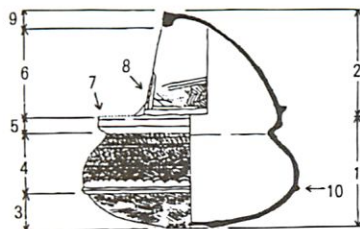
まず、この土器のもつ特徴的な部位として、面と耳がある。面は、覆部側の開口部の口縁で、拡張したり装飾が加えられたりする。耳は、開口部両端付近の口縁部から覆部にかけての部分に貼り付けられた小さな耳状の突起である。面はどの手焙形土器にもあるが、耳は付けられるものと付けられないものがある。

次に、出土する時期が短く限られている。弥生時代後期後半から古墳時代前期前半ごろまでである。九州北部から関東地方にみられ、大阪府・滋賀県を中心とした近畿地方に多い。近畿地方以外は出土数が極端に少ないが、岡山県は130点余が報告されており、例外的に出土数が多い地域である。津山市内では、現在までのところ2点出土している。

さらに、日常的に使用される土器と比べると出土数が少なく、出土状況などから用途は祭祀と推定されているが、具体的にはまだよくわかっていない。内部に煤が付着しているものや、変色したものもあることから、火を焚くために使用されたという説などがある。

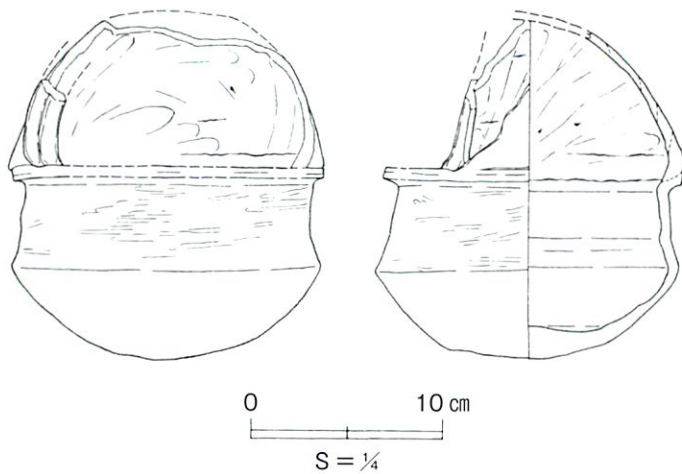
手焙形土器の本格的な研究がされたのは1970年代以降であり、現時点では形態分類や成形技法に関する論考が多い。その成果として口縁部の形態と、鉢部と覆部との接合方法による形態分類法が近畿地方を中心に定着しており、時間的・空間的な変化が明らかになってきている。

岡山県内においては、口縁部形態よりも鉢部と覆部の形成過程の方がより顕著な特徴差が認められるため、これをもとに分類と時期区分が提示されている。形成過程は大きく3つに分けられ、一般的にダルマ型と呼ばれる鉢部と覆部が一体化したものの、いったん鉢を完成させてから覆部を形成するもの、皿もしくは浅鉢状の底部を作り、その上端に立ち上がりをもたせた鉢を完成させてから覆部を形成するものである。



1	鉢部	6	開口部
2	覆部	7	口縁端部
3	底部	8	耳
4	体部	9	面
5	口縁部	10	突帯

現代の手焙火鉢の例（上）と手焙形土器の部分名称
（高橋一夫『手焙型土器の研究』六一書房 1998より）



高橋谷遺跡出土の手焙形土器 トレース図（左）と写真

2 寄贈された手焙形土器について

寄贈された手焙形土器は、津山市山北地内、高橋谷遺跡の包蔵地内の畑で発見された。高橋谷遺跡は集落遺跡で、弥生時代の住居址や中世の井戸がみつかっており、出土遺物には弥生時代前期から後期の土器・石器や、平安時代末から鎌倉時代の土器・陶磁器などがある。

寄贈品は口縁部及び面の大部分と、覆部の頂から面にかけての部分が欠損している。

鉢部は丸底で、胴の上半はくびれるように内行し、最大径部分は稜を成す。口縁端部までしっかりと作られており、くの字状口縁で口唇部をわずかに引き出し、強いナデが施される。外面は横方向のミガキの後にナデ仕上げ、内面は稜よりも上部は丁寧であるが下部はやや荒いナデ仕上げである。

覆部は鉢部に比べるとつくりが荒く、粘土紐を積んでいった痕跡がよく観察できる。内外面共にナデが施される。鉢部口縁の内面が接合面となっており、覆部が鉢の口縁端部を隠さないようにして作られている。面は端部に幅広の粘土紐を貼り付けて形成され、中央に稜をつまむようにしてつくりだし、ナデで整えている。

焼成は良好で、二次的に焼けた部分や煤の付着は認められない。鉢部のかたちが津山近隣の鉢形土器の型式にはないため、詳細な製作時期は不明

であるが、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものとの推定される。

3 津山市内の手焙形土器の特徴

先ほど紹介した高橋谷遺跡のものに加え、津山市内で出土した2点の手焙形土器を紹介し、市内の手焙形土器の特徴について簡単にまとめてみたい。

・天神原遺跡出土品

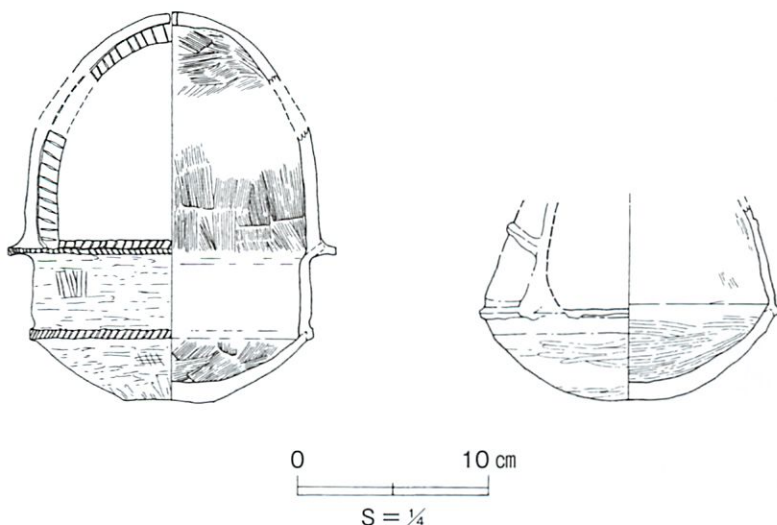
天神原遺跡は津山市河辺地内の古墳や集落を含む遺跡である。手焙形土器は住居址の壁溝から出土した。覆部の一部を除いておおよそのかたちが復元できる状態である。

鉢部は平底で、浅鉢状の底部の上端に垂直立ち上がりをもたせた形である。底部と覆部の接合箇所が突帯状になっており、刻み目が施される。外面調整は目の粗いタテハケ後横方向のミガキが、内面にはハケメが認められる。覆部は外面に目の粗いハケメが、内面には密なハケメが施される。面は外側へし字状に折り返して拡張し、刻み目で装飾される。鉢部口縁の内面を接合面とし、接合後口縁部を覆うように突帯をめぐらせ、刻み目を施す。また、覆部中央に焼成前穿孔がなされ、全面が丹塗りされている。焼成は良好で、二次的に焼けた部分や煤の付着は認められない。時期は

弥生時代後期末である。

・上部遺跡出土品

上部遺跡は津山市草加部地内の集落遺跡である。手焙形土器は住居址の床面から出土した。底部から覆部の下半までが復元可能である。



天神原遺跡（左）および上部遺跡（右）出土の手焙形土器

浅鉢状の底部と覆部が一体化して

いるため、ダルマ型に含まれるかたちである。丸底で、外面はハケ調整後横方向のミガキが、内面はハケ調整後ミガキが施される。覆部は内面にハケメとナデが、外面にはハケ調整後ミガキが施され、装飾として小さな突帯が1条貼り付けられている。面は端部をわずかに肥厚させて丸く収める。鉢の端部を接合面とし、接合部を突帯のようにつくりだす。焼成は良好で、二次的に焼けた部分や煤の付着は認められない。時期は弥生時代後期末である。

以上3点の手焙形土器の特徴について簡単にまとめた。

手焙形土器は全国的にみても同じ規格で作られているものが少なく、1つ1つの個性が強いという特徴があるが、津山市内のもも同様である。

3点それぞれの形成過程や面のつくりが異なるため、近い時期に近い場所で作られた同じ種類の土器とは思えないほど個体差がある。しかしながら、鉢部口径が16cm前後とどれも同じくらい大きさであることや、鉢部の調整では横方向のミガキが施されるなど、鉢部については共通点が多い。

い。

また、鉢の形状はこの時期の津山市内において通常使われている鉢形土器のかたちとは異なるものでもある。岡山県内でも手焙形土器の出土が集する南部においては、通常使われている鉢形土器に覆いをつけた手焙形土器も出土しているが、津山市内の手焙形土器はそれとは異なり、いずれもはじめから手焙形土器を作る目的でつくられているという点も共通した大きな特徴といえる。

4 おわりに

今回は形成過程や器面調整を中心に手焙形土器を紹介した。日常的には使わず、この地域には元々ないと思われる種類の土器を当時の人々がどうやって知り、どうして作ったのか、またその用途についてなどまだまだわからないことが多い。これらの点については、『津山市史』編さんを通じて当時の津山の人々について学び、改めて考えたいと思う。

● 津山市史講座（講演会）

隠元が近世の日本に与えた影響

—書道文化を中心に—

7月26日開催

講師：愛知学院大学准教授 劉 作勝氏



講師の劉作勝氏



会場の様子

津山藩主森長継の生母・溪花院の50回忌供養のため、寛文4年（1664）に長継が隠元に依頼して書かれた詩偈^{しげ}が、倉敷の龍昌院で見つかり、郷土博物館に寄託されました。この資料を鑑定した劉作勝氏を講師にお迎えして、近世初期に日本に渡来した隠元はじめ黄檗僧たちによる文化的な影響についてご講演いただきました。

劉氏は中国大連市のお生まれで、平成9年に来日して大学で書道教育や美術史の研究を重ねられました。隠元はじめ黄檗僧の来日前後の中国・日本の書道文化への造詣が深く、またご自身でも幼少期から書をたしなみ、書での受賞歴も多数お持ちです。

ご講演では、まず隠元来日の経緯からひも解かれ、当時の日本で単に黄檗宗が広まっただけでなく、インゲン豆や煎茶、原稿用紙や明朝体など、さまざまな中国の文物が受容されたことを紹介されました。そのうえで、隠元の書の特徴や源流を明らかにしながら、日本の書道界に与えた影響の大きさを力説されました。

お話はとても流暢で、時には研究上のこぼれ話もユーモアを交えて紹介され、終始なごやかな雰囲気でした。会場をほぼ満了した60名の聴講者の皆さんは熱心に聴き入り、質疑応答でも多くの質問が出され、盛況な講演会となりました。

津山市史だより
第4号

発行：平成27年12月1日
編集：津山市史編さん室

〒708-0022 岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内

TEL：0868-22-5820 FAX：0868-23-9874 Eメール：tsu-haku@tvt.ne.jp